
龍は暁に啼く

高嶺 蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍は暁に啼く

【Nコード】

N0171X

【作者名】

高嶺 蒼

【あらすじ】

世界を構成する5つの大陸。その1つである中央大陸に生きる一人の少女の物語。異世界からこの世界に落とされた彼女は、夢に出てくる人物の願いをかなえるべく、旅立ちの時を待っていた。そして時は来た。養い親や優しくしてくれた人達、その全てに別れを告げて、少女は旅に出る。それは彼女のルーツを紐解く旅でもあり、たくさん愛しいものを救うための戦いの始まりでもあった。……なんてかっこつけて書いてみましたが、結局のところ、男の子にか見えない女の子の冒険の物語……になるはずです。はい。どうぞ

よろしくお願ひします。

序章

序章

夢を見る。

繰り返し、繰り返し……まるで壊れかけのレコードのように、その夢はやってくる。

いつも忘れた頃、突然に……

始まりは唐突。

気がつくところの世のどこでもないような場所を、一人歩いている。霧とも違う、薄もやの中を何かを探して必死に進む。

何を探しているのかも分からないまま、でも、何かを探さなくてはいけないことだけは分かっている。

探して、探して、探して……でも見つからなくて。ただ途方にくれる。

そうすると、決まってその声は聞こえてくる。

まるで音楽の音色のように耳に心地いいその声は、遠くの方で繰り返しその名前を呼ぶ。

「……ライ……ライ……サ……雷砂……」

「だれ……?」

目を、凝らす。

薄いもやの向こうに誰かがいた。

背が高く、均整の取れた体型が見て取れる。

その人はまっすぐに雷砂の目を見ていた。金色の、その美しい瞳で。

腰の辺りまで伸びた長い銀系の髪が、風に吹かれてかすかに揺れている。

生きている人とは思えない程……まるで神々の一員であるかのよ

うに美しい青年だった。

彼は、苦しそくに、悲しそくに表情を曇らせている。憂いを帯びたその表情が胸をしめつけた。

何とかしてあげなくては 何をどうしていいかもわからないまま、そんな風に思う。会ったことがないはずの人なのに、なぜか懐かしく慕わしい。

何かに背を押されるように走り出す。彼の近くに行けば、少しでも助けになれるかもしれない そんな風に思ったのも、きつとただの言い訳。少しでも近くに、そばに行きたかった。

しかし、走っても、走っても……その姿は近くなならない。むしろ、少しずつ遠のいていく。

届かない、その姿に手を伸ばす。待つてくれと、そう叫びながら。「……を、探せ。」

姿が遠のく。さつきまでよく聞こえた声も、だんだんと聞き辛くなってくる。

「……っつ。何を……何を探せばいいんだ？」
息を切らせながら、叫ぶように問いかける。

「我を……我を探せ……ここから我を解放できるのは、お前だけだ……」

「探すってどうしたらいいんだ！？オレにはあんたが何処の誰かも分からないって言うのに」

「源をたどれ。己の源を。お前なら、きつと見つけれられる」

「源……？己の源ってなんだよ！？そんなんじゃ分からないよ！」

霞の向こうに、青年の姿が消える。声が遠くなる。遠く、遠く……。

「探すのだ。己の源を。たどるのだ。お前が生命を受けた、その根源を……」

「分からないよ。教えてくれ、オレはどうやってあんたのところへ行けばいい!？」

立ち止まり、途方にくれたように問いかける。

「どうしたらあなたに会える……？」

立ち尽くし、見上げたその先。白で埋め尽くされた視界を大きな影がよぎった。山よりも大きなその影は、大きな翼を広げて羽ばたいた。

突風が吹き荒れ、雷砂の体が宙を舞う。

「雷砂……お前を、信じている」

かすかに聞こえた青年の声と、何か大きな獣の空を引き裂くような咆哮。猛々しく、気高く、神々しい……。

しかし、雷砂がその音色に聞きほれていられたのもほんのつかの間。空に放りだされた浮遊感と、ついで襲った地に落ちていく感覚に、雷砂は声の限りに叫んでいた。

目を、開ける。

外はまだ暗くて、どうやら朝の訪れはだいぶ先のようだ。

全身が汗にまみれ、濡れていた。両手で顔を覆い、深く息を吐き出す。

相変わらず寝覚めの悪い夢だった。

5年間、繰り返し、繰り返し見続けてきた夢……。

ただの夢ではない。意味のある夢に違いないと信じながらも、ずっと何もできずにいた。

自分が何の行動も起こさずに、日々を生きることには抵抗がなかったかといえは嘘になる。

しかし、5年前の自分はまだあまりに幼くて……自分だけの力で行動を起こすことは出来なかった。そして、それからの5年間は、ただただこの世界で生きていくことに精一杯だった。

今年こそ そんな風に思いながらそつとこぶしを握る。

雷砂は今年で10歳になる。

この世界で生きる事にもだいぶ慣れてきた。

10歳 大人とは呼べないが、もう決して子供でもない。5年か

けてこの世界の言葉を、常識を学び、一人で生きていくための力を養ってきた。いいかげん、ひとり立ちをしても良い頃だ。雷砂は今年に入ってそんな風に考えることが多くなってきていた。

世間一般の大人が聞いたら決して頷いてはくれない意見だろう。ただの子供の強がり。単なる我がままだと、そんな風に言われてしまいかもしれない。だが、雷砂は本気だった。

小さく息をつき、起き上がる。眠気はもうすっかりどこかへ言っってしまった。目を閉じてても、再び眠ることはきつと難しい。

それならそれで、やることはたくさんある。一人で生きているのだ。毎日、やらなければならぬことは山積みだった。

まあしかし、仕事の前にまずは着替えをして、顔を洗って、それから……。

考えながら立ち上がろうとした時、ひんやりとした何かが頬に触れた。

「……………ロウ」

微笑み、いつの間にか傍らにきて雷砂の頬に鼻面を寄せている忠実な友に呼びかけた。彼の黄金色の瞳は、雷砂を気遣うようにじつと見つめている。

「心配してくれたのか？ロウ」

銀色の毛皮に包まれた大きな体に手を滑らせながら、その瞳を覗き込む。大きな舌が、雷砂を元氣付けようとするかのようにその頬を舐め上げた。

くすぐったそうに首をすくめ、腕の中に大切な友達を抱きしめる。ふさふさと立派な尻尾がパタンパタンと左右に動くのを見つめながら、ささやく。

「ありがとう。大丈夫だよ、ロウ。また、いつもの夢を見たんだ。この世界に来てから、ずっと見続けている、あの夢……………」

目を閉じると浮かんで来るのはあの青年の顔だ。

まるで知らないはずなのにどうしようもなく心が惹きつけられる。雷砂の脳裏に浮かぶその顔は、なぜだか悲しそうな顔をしている。

その答えは簡単だ。雷砂の夢の中のあの人はいつも同じ表情をしている。信じていると言いながらも、いつでも彼は心配そうに切なそうに雷砂を見ているのだ。だから、彼の笑う顔を、雷砂はまだ知らない。知らないものを思い描くことは出来ない。そういうことだ。でも、いつか知ることが出来ればいいと思う。その思いが叶う時それは、雷砂が彼の願いを叶えることが出来たときだろう。

我を探せ……我を解放できるのは、お前だけ……。

青年の声が頭の中をぐるぐる回っている。

自分にいったい何が出来るのだろうか 雷砂は考える。己に何の力もないことは、本人である雷砂がよく知っている。一人で生きていくだけで精一杯の、ただの子供に過ぎない。

だが、あの人はいつも繰り返す。

雷砂……お前を信じている と。

ただの夢かもしれない。繰り返し見るのは、ただの偶然なのかもしれない。普通に考えればそうなのだろう。

しかし、雷砂は信じていた。

あれはただの夢ではない。

彼は、この世界のどこかにいて、助けが来るのを待っている。他の誰でもない。雷砂が助けに来るのを。

「何とかしなきゃ」

決意を込めてつぶやく。

「ここにいるだけじゃ駄目だ。ただ、日々を生きているだけじゃ駄目なんだ。もっと考えて、決断して、何か行動を起こさなきゃ。今のままじゃ、いつまでたってもあの人を助けることは出来ない」

分かっている。何かしなくてはと、何度も何度も考えてきた。だが、どうしても最初の一步が踏み出せない。どこに、その足を下ろしたらよいか分からない。進む方向すらわからない状態なのに、前に進むことなんて出来やしなない。

「どうしたらいいんだろうな。どうやってたら、あの人の待つ場所へ行けるんだろう……」

途方にくれたようにつぶやく。

その問いに、答える声はない。

探すのだ。己の源を 彼の声が再び頭に響く。

「源……か」

眩き、膝を抱えた。今はその言葉の指し示す先さえ見えない。だが、いつか分かる日が来るかもしれない。雷砂はその日を待っていた。自分の人生が転換するであろう、その時を。

彼の言葉の意味を正確に理解できた時 その時こそが今の平穏な生活を置きざりに、新たな世界に飛び出していく時なのだろう。

身じろぎもせずに、雷砂はいずれ訪れるその時のことを思う。

忠実な一対の黄金の瞳だけがじっと、そんな雷砂を見つめていた。

序章（後書き）

この話の元は私が中学生の時に書いた話です。少しずつ手直ししながら、暖めていたもので、つたない内容ではありますが、ちょっとでも楽しんでもらえれば嬉しいです。キャラクターが生き生きと動き回れるような世界を作れるように頑張ります。

第1章〜1〜

第1章〜1〜

この世界は、5つの大陸から成り立っているといわれている。

冬に支配され、神々の住まう山脈が連なり神の大地とも呼ばれる北の大陸。

世界の最南に位置するのは、気候・風土共に穏やかな常夏の大陸。さまざまな種の生き物が雑多に共存する生者の楽園。

東の果てにある大陸は、黒髪・黒瞳の人種が住まう神秘の国。他の大陸から最も遠くに位置することもあり、他大陸との国交もなく、常に秘密のベールに隠されている未開の地。

西には異界に続く門がある。不思議な種族にあふれ、魔術という名の異能を持つものが数多く生まれる大地。

そして すべての大地の中央に位置する最後の大陸、それは、神聖なる獣、龍族の住まう大地。彼らは人族と共存し、時に気まぐれに、彼らに祝福を授け、友情を結ぶこともあるという。

神の代弁者たる龍族の住まうその大地の名を、シエルヴァ・ガールンディアという。

その草原は、ガールンディア大陸最大にして唯一、獣人族の支配が許されている土地であった。

大陸の南に位置し、他の、人族の国からの侵略とは無縁の領土。それがヴィエナ・シエヴァールカ 古代語で『侵されざる楽園』と呼ばれるこの草原だった。

この草原では、人族の世界の法は通用しない。守らなければならぬことはただ二つ。

一つ、食べる目的以外での狩猟の禁止。

一つ、身を守る目的以外での闘争の禁止。

上記の二つの決まりごとを除いて、この草原に守るべき法はない。たとえ人族の身であったとしても、草原の中においてはこの法に縛られる。どれほど身分の高い人間であろうと、関係なく。

草原の外に出た獣人族が、人族の法に従わざるを得ないのと同じように。

逆に言えば、誰であろうともこの草原に立ち入る権利はあるのだ。唯一の条件は、己を守る牙があるかどうか……ただそれだけ。

朝日の照らし出す美しい草原を、小さな影が動き回っていた。

ヴィエナ・シェヴァールカの西の端。獣人族の掟が支配する、その内側である。

太陽の光を受けて、短く切りそろえられた黄金の髪が煌めいている。人族の子供だった。まだ幼い。10歳を超えるか超えないか親の庇護から抜け出すには少し早い、細く頼りない体をしている。背中には体には不釣り合いの大きな籠を背負っていて、どうやら薬草を採取しているようだ。

この草原には、他にはない貴重な薬草が数多く自生している。それらの多くは、人族の集落において高値で取引をされる。もちろん、薬草自体の希少性もあるが、それ以上に採取できる場所が限られている上に危険な場所ばかりということが、値段に反映されているのだろう。売るほうも法外な値段を持ちかけるが、買うほうも文句はつけない。その薬草を手に入れるまでにどれほどの危険が伴うか、それを良く知っているからだ。特定の入手ルートはなく、どうしてもすぐに手に入れたければ、傭兵を雇うか、獣人族に通じるつてを探すしか方法はない。

『侵されざる楽園』と呼ばれるこの草原は、それほどまでに危険な場所であった。

しかし、そんなに危険な草原になぜそんな子供が出入りしているのか。

小さなその体は、何の迷いも怯えもなく草原の草の間を歩き来す

る。時折、何かの気配を探るように顔を上げ、周囲の様子を伺うが、特に大きな武器を持っている様子もない。

腰の帯に指した小さな短刀のみが武器らしい武器ともいえる。

だが、そんな小さな牙ではこの草原を生きぬくことは出来やしな
いだろう。

大の大人が、背丈ほどの長剣を有していたとしても、並大抵の努力では生き抜けない そんな場所なのだ。

たとえその子が己の身の丈にあった剣を持っていたとしても、ここでは役には立たない牙にすぎない。

小さな命がその輝きを失うのは、時間の問題であろうと思われた。

第1章 2

第1章 2

風が吹いた。

草が揺れ、草と草が触れ合う音を響かせる。吹き上げられた青臭い匂いを鼻腔に吸い込み 次の瞬間、小さな手が腰の短刀を引き抜いた。

油断なく、正面をにらむ瞳は左右色違い。太陽の輝きをそのまま封じ込めたような黄金の左目と、夜の闇を連想させる濃紺の右目。

金色のたてがみが風にゆれ、短刀を油断なく構えるその姿は、まるで一匹の小さな獣のようであった。

不意に目の前の草むらが割れた。咆哮と共に、大きな獣が飛び出してくる。

襲撃を冷静にかわして、獣の後方に回り込み、その大きな体を観察する。

金色の毛皮に黒の縞模様が入った体……虎に良く似ているが、長く伸びた二本の犬歯がその獣の名を浮かび上がらせる。

俗に、ヴィエナス・タイガーと呼ばれる、この草原でも1、2を争う凶暴な肉食獣だ。

食物連鎖のトップに位置するこの獣は、恐れを知らぬかのように、小さな獲物と対峙する。

「……まだ、若い固体だな」
つぶやくような、幼い声が響く。

その声に反応するようにのどの奥でうなり声を上げながら、獣は少しずつ距離を縮めてくる。確かにまだ若い。二本の犬歯も、成獣の牙の長さには足りていないのが見て取れる。

「出来れば、傷つけたくないけど……」

間合いを取りながら、困ったように眉根を寄せる。

傷つけたくはないが、それが難しいことも良く分かっていた。特に若い固体は、血気盛んで恐れを知らない。脅かしたくらいで逃げ出してくれるほど、甘い相手ではないだろう。

短剣の剣先を、獣へと向けた。死にたくなければ、やるしかない。それが、この草原の原則だ。

「足……はだめか。動きが鈍くなると、他のやつらに狙われる。仕方ない。鼻面を少し削って脅かすか。それであきらめてくれればいいんだけどな。」

低くつぶやき、短刀の切っ先を地に向ける。体の力を抜き、わざと隙を作って獣を誘う。

その隙を逃すことなく、獣の四肢が力強く地を蹴った。

それとほぼ同時、草を踏みしめ、駆け出そうとしたその時、猛々しい咆哮と共に、横の草むらから一頭の美しい獣が飛び出してきた。

「……ロウー！」

銀色の毛皮に包まれた、並外れて大きな体躯のオオカミは、主人を守るように立ちふさがると、黄金の瞳で敵を睨みつけた。

とたんに、それまで威勢が良かったヴィエナス・タイガーの腰が引ける。若い獣は、明らかに銀のオオカミに怯えていた。

のどの奥で低いうなり声を上げながら、ロウが足を踏み出すと、それに押されるように若い獣が後ずさりをし……不意にぱっと身を翻すと、草原の草の中に消えていった。

拍子抜けしたように獣がいなくなった場所を眺め、小さく息をつく。負ける気はなかった……が、やはり緊張はしていたのだ。

肺の中にたまっていた空気を今度は大きく吐き出し、背中の籠を担ぎなおす。籠はまだ半分も埋まっていない。今日の仕事はまだまだこれからだった。仕事再開とばかりにかがみこんだ雷砂の背後から、その声は響いてきた。

「流石はロウだな。もうすっかりこの草原を自分の縄張りにしてしまったようだ」

凜とした響きを持った、高すぎも低すぎもしない、耳に心地いい声。それは雷砂の耳によくなじんだものだ。

「シンファ……見ていたなら、間に入ってくれば良かったのに」
ぼやくように言いながら振り向くと、そこにはいつの間にも現れたのか、一人の女性が立っていた。声が聞こえるその瞬間まで、何の気配も感じなかったというのに。

黒い双眸を細め、シンファは養い子の傍に歩み寄る。風向きが変わり、彼女の長い漆黒の髪を揺らし、芳しい甘い香りを雷砂の元へと運んだ。

「子育ては甘やかすだけでは駄目だというぞ？それに、たとえ口ウが間に入らなくても、お前なら何とかできただろう？雷砂」
手を伸ばし、金色の髪の毛を乱暴にかき混ぜる。

「その為にわざわざ風読みをして風下から？オレを驚かせようって魂胆だったんだろうけど……まったく、子供じゃあるまいし」
くすぐったそうに首をすくめながら、少しあきれたように言葉を返す。そして、頭二つ分は優に上にある養い親の顔を見上げた。彼女は草原を渡るにふさわしいとは決していえない軽装に身を包み、腰には一振りの剣を佩いている。だが、何の気負いも無く立つその立ち姿に隙は無く、女性でありながらも歴戦の戦士を思わせた。

彼女は漆黒の瞳を優しく細めて問いかける。

「今日もいつもの日課か？」

「うん。今日は泉の方に足を伸ばそうかと思っているんだ」

「泉か……。今日はラグディンガの群れを見かけたから気をつけようがいい。仔が加わっていたから、気が立っているだろう。体は小さくとも猛獣だ。一対一ならいいが、集団でかかってこられると厄介だぞ。泉にも現れるかもしれない」

「ありがとう。気をつける。そういえば、今日は何か用事でも？」

「ん……？ああ、そうだった。特に用事というわけではないが、しばらくこの辺りを留守にするから、そのことを伝えようと思ってな」

「部族の用事？」

「まあ、そんなところだ」

雷砂の問いかけに頷く。

「叔父上の体調が優れなくてな。代わりに部族会に行かねばならん。面倒な話だが、叔父上の身内は私しかいないからな。ま、仕方なかろう」

肩をすくめ、心底面倒くさそうな様子の養い親を、笑って見上げた。まだ若く、女性の身ではあったが、彼女はこの草原の支配者、獣人族の一部族の若長ともいえる立場にあった。

「まだ寝ていると思つて、先に巣穴を覗いたんだが……」

「家にも来てくれたの？ごめん。今日はなんだか早く目が覚めて日が昇るのと同じくらいに草原に出ていたんだ」

「……なにか、あつたか？」

草の上に膝を落とし、心配そうに問いかける。

剣を握りなれた少し硬い指先が雷砂の頬にそつと触れ、優しいまなざしがまつすぐに目を覗き込んでくる。

心配は無いと微笑んでみせたものの、そんなことで誤魔化されてくれる訳も無く、

「少し、顔色が悪い」

と、形のいい眉をしかめた養い親に、正直に話せと軽くにらまれ、思わず苦笑が漏れた。

「大した事じゃない。ちょっと夢見が悪かつただけだ。シンファが心配するようなことは何もないよ」

「……いつもの、夢か？」

問いかけに、頷きで答えを返す。

吐息を漏らし立ち上がった養い親を見上げて、大丈夫だよと微笑んでみせた。それでも彼女は心配そうに雷砂を見つめる。

「……もう5年だ」

「……」

「お前が私の前に現れてからもう5年もたつのに、悪夢はまだお

前を苛んでいる。私には、何もしてやることが出来ない」

「シンファ……」

「情けない限りだ。私には何の手助けも出来ない」

「違うよ、シンファ。それは違う。シンファはいつも、オレを助けてくれるじゃないか」

握り締められたシンファの両のこぶしを小さな手で包むように握った。

落ち込むシンファを見るのは辛かった。情けないなんて、思ったことも無い。

あるのはただ、胸にしまいきれないほどの感謝の思いと、溢れんばかりの愛情だけ。

5年前、ロウと二人、この世界に放り出された雷砂を拾って、何の見返りも求めずに育ててくれた。

こちらの言葉も話せず、意思の疎通も難しい面倒な子供を愛しんでくれた。話す言葉を教え、生きる術を教え……愛情を教えてください。

それがどんなに大変なことか。それを理解できないほど、もう幼くはない。

「色々な事を教えてくれた。何の役にも立たないオレを好きだった……大切な人だったってそう言ってくれた」

シンファと過ごした5年間……数え切れない程の思い出がある。そのどの瞬間を切り取っても、幸せな気持ちしか思い出せない。

5歳の時に母を亡くし、もう二度と手に入らないはずだったものを、シンファは惜しみなく与えてくれた。人として、親として、友人として。

「オレはシンファが大好きだよ。死んだ母さんと同じくらい、大切な人だっと思ってる。夢のことは、シンファが気にすることなんて無いんだ。オレが、自分で解決しなきゃいけないことだから」

きゅつと唇を引き結び、うつむいた雷砂の頭を見ながら、シンファは優しく目を細めた。

その姿が、初めて出会った頃の雷砂と重なる。中々懐こうとしない、はつきりいってあまり可愛げがあるとはいえない子供だった。声をかけてもただ俯いて、友であるオオカミの毛皮の陰にかくれてしまう。

見捨ててしまおうかと、こみ上げる感情のままに何度か思ったこともあった。近くの村に預けて、同じ種族に任せればいいと。だが、なぜかそうすることが出来なかったのだ。優しさからでも、特別な愛情からでもなかった。なんとなく、ただなんとなく、妙に頑なで可愛げの無い子供に興味があった。だから、結局手放さずここまできてしまった。

それで良かったのだと思う。あの時、遠慮がちにすぎる小さな手を振り払い手放してしまっていたら、こんなにも誰かを愛しいと思うことすら知らないでいたことだろう。分かり辛くはあるが、だが確かに向けられたその愛情を感じる幸せを、知ることも出来なかった。

五年という、決して短くはない歳月が過ぎ、昔よりはるかに分かりやすくなった不器用な愛情を見せられて、愛しい思いがこみ上げる。その気持ちに抗しきれずに、衝動的にその細い体を抱きあげていた。

「うわっっ」

予期せぬことにうるたえた声を上げ、年相応の子供の顔に戻った養い子を、ありったけの愛情を込めて抱きしめる。

血のつながりもない、種族も違う、ただの他人だと、部族の仲間達から言われ続けてきた。確かにその通りだ。雷砂とシンファの間に血のつながりはなく、種族も違う。だが、ただの他人かと問われて頷けるほど、浅い関係ではない。少なくともシンファの方はそう思っている。雷砂もそう思ってくれているはず。そう思っただけが、確信は持てないでいた。何しろ、甘えるのが極端に下手なのだ。感情を素直に見せるのも上手ではない。シンファとしてはもっと大いに甘えて欲しいと思っているのに、雷砂は妙に遠慮してなんでも

自分でやってしまおう。

実は、雷砂にとつて自分はあまり必要な存在ではないのではないかと、少し……いや、かなり不安に思っていたりもした。

しかし、今、二人の気持ちは同じなのだということを、雷砂の言葉が証明してくれた。

「シンファアッ!」

照れて怒ったような雷砂の声。

まだまだ子供だな シンファは思う。どんなに大人ぶっていても、並の大人も顔負けの知力と行動力を持っていても まだほんの子供なのだ。もう少しこのままでいてほしいと思うのは、大人のわがままだろうか。きっとそうなのだろう。だが、もしそうだとしても、シンファは今、大いにわがままを言いたい気分だった。

「あまり急いで大人になつてくれるなよ?」

そんな言葉が口をついて出る。

「シンファ?」

「もう少し、子供のままでいる。私はお前をもっと甘やかしたい。我儘も言ってもらいたいし、その我儘を聞いてやりたい。大人になんか、いつだつてなれる。だが、過ぎた子供の時間は取り戻せないんだぞ?」

もつと甘えてもいいのだと、黒い双眸が養い子を見つめる。もつと甘えてほしいのだと。

だが、分かっているけど、中々うまく甘えられるものでもない。自分は十分に甘やかしてもらっているという意識もある。これ以上、甘やかしてもらっては困るという思いも、どこかにある。

シンファが大好きだった。けれど、いつまでも彼女の世話になっているわけにもいかない。お互いがお互いをどんなに思いあついても、所詮血のつながりはなく、自分の存在がいつ彼女の負担になるか分からない。

そんなことを少しでも考えたと知られたら、優しい養い親はきつととても怒るのだろうけど。

雷砂は、少し困ったように笑って養い親の顔を見る。

シンファもまた、真剣な表情で雷砂を見ていたが、不意にその表情を緩めた。

「まあ、いい。私が必要と言おうとも、お前はお前らしく生きるだろうし、そうする権利もある。親というものはつまらないな。結局、見守ることしか出来ないんだ」

ストーンと草の上に小さな体が下ろされる。

「シンファ……」

見上げてくる養い子の色違いの瞳を覗き込み、柔らかな金髪をそつと撫でた。

「すまんな。大人のたわごとだ。お前はお前らしく、生きてくれればいい。ただ、私の言葉も頭の片隅に置いておいてくれると嬉しいがな」

「……うん」

頷く雷砂に、シンファはにっこりと微笑んでその細い肩に手を置き、

「さ、薬草集めに行くんだっただな。私も少し付き合おう」

促すようにゆっくりと歩き出した。

第1章 3

第1章 3

「そういえば、サライの村祭りに旅芸人の一座が来るらしいな」
泉に着き、せっせと薬草を集めている雷砂の背にシンファがそう話しかけた。

「そうなの？知らなかった」

作業に集中しながら反射的に答えると、

「おいおい。私よりよっぽどお前の方が村の事情に詳しいんじゃないのか？」

あきれたようにシンファ。雷砂は微笑って、

「詳しくなんかないさ。それに、村の行事にはあんまり興味がないんだ。村に顔を出すのも薬草の取引のときくらいだし、詳しくないりょうもだいだろ？」

そう返す。

言葉の通り、雷砂は薬草の取引き以外でほとんどサライの村に顔を出すことはない。

サライは雷砂の住処から一番近い、人の集落だ。さほど大きくはない村だが、草原への中継地としてそれなりに賑わっている。草原へ向かう旅人や、草原から戻る旅人が、旅に疲れた体を休める要所それがサライという村だった。

そんな土地柄のせいか、小さな村にありがちな、他人を寄せ付けない排他的な雰囲気はなく、村人達はみな明るく親切だ。

獣人族と親しい付き合いがある、胡散臭い子供に対してもその態度は変わらない。とても親身に、まるで身内のような暖かさで接してくれる。

雷砂はそんな村の人たちが、村の空気が大好きで、だからこそほ

んの少し距離を置く様にもしていた。居心地のよすぎる場所は苦手だった。ずっとそこにいたい……そんな甘えが思いがけず顔をのぞかせてしまうから。

「世話になってる村だろう？たまには色々貢献したらどうだ？それに……噂は聞いているぞ？」

「噂？」

内心首をかしげる。噂になるようなことを、自分はその村でしていただけるのか 考えてみるが心当たりがない。

「村長の一人娘のことさ。お前にご執心らしいじゃないか」

シンファの言葉に、一つ年下の少女の顔が頭に浮かんだ。栗色の髪と瞳の、明るくて少し勝気な少女。ミルファーシカ 村長が目に入れても痛くないほど可愛がっている一粒種だ。

村に行くとは処からともなく傍にやってきて、何かと一緒に行動することが多いし、ちよつと必要以上に懐かれている自覚はある。自覚はあるが、しかし……

「ミルのこと？そんなんじゃないよ。一方的に懐かれてるんだ。可愛いと思うし、妹がいたらこんな感じかなって、そんな風には思っけど……。でも、それだけだ」

「そう思っているのはお前だけじゃないのか？ん？」

からかうように言われ、雷砂は苦笑いを浮かべる。

「そうはいつでも、こう見えてオレは女だよ？女にもててもしょうがないだろ」

いくらシンファが疑ってかかったところで、雷砂もミルファーシカも女同士。浮いた話に仕立て上げようというのが無理な相談だ。まあ、本気で思っているわけではなく、ただ単に養い子をからかってやろうと思っているだけなのだろうが。

「もつたいないな。折角もててるのに。かと言って、男にもててもあんまり喜びそうにないがな、お前は」

ニヤニヤと、人の悪い笑みを顔いっぱい浮かべた保護者を横目で見ながら、ささやかな仕返しを試みようとして口を開く。

「オレの心配をする前に、自分の心配をしたら？知ってるよ。この間も求婚してきたジンガ族の若長を袖にしたんだって？」

「つつっ！誰がそんな事を吹き込んだんだ！？」

「さあ、誰だったかな。でも、かなり残念がってたよ。ジンガ族とライガ族の絆を深めるいい機会だったのに台無しだったさ」

「つつたく。昔のお前はもつと素直で可愛かったぞ。どうしてこんなに可愛げがなくなったんだ！？」

「誰かさんの影響じゃないの？育て方の問題だよ。子供は親に似るもんだ。そうだろう？」

「……まつつたく」

苦笑い。その瞬間、草の間を強い風が吹き抜けた。

シンファはその風の行方を追いかけるように顔をめぐらせた。

「そういえば……覚えてるか？あの日も、こんな風に風が強い日だったな……」

不意に思い出した記憶に懐かしさを感じ、問いかけると、雷砂も同じように風の行く先をを目で追いかけながら頷いた。

「覚えてるよ……覚えてるさ。忘れられるわけがない。あの日之境に、オレの人生はそれまでとまるで違ったものになってしまったんだから」

色違いの瞳が、遠くを見つめる。

目の前の景色を、己を育ててくれた草原を、この世界を……何もかもを突き抜けて、ここにはないものを見つめるような、そんな眼差しで。

第2章 1

第2章 1

草の匂いに、むせ返りそうだった。

こんなにも濃い草の匂いをかいたのは初めての経験だった。

不安な気持ちを押し殺しながら目を開けると、今までに見たことの無い数の星が、目の前の空に浮かんでいた。

そのまましばらく、身動きもしないで星に見入っていたが、不意に自分の置かれた状況の異常さに気がついて小さな体を硬くする。

眠りについた時は、家の中にいたはずだった。あまり馴染みの無い親類がこぞって集まり、いつに無く騒がしい、自分と母の家の中に。

白い服を着せられ、青白い顔をしたまま眠る母。話しかけても答えてもらえず、悲しくなって泣き出しても抱き上げてはもらえなかった。そのまま泣き疲れ、冷たい母の隣で眠ってしまった。そのはずだった。

それなのに……。

今いる場所は何処なのか。少なくとも家の中ではない。家の中にこんなに美しい星空があるはずもないのだから。

恐る恐る体を起こし、辺りを見回してみる。暗くてほとんど何も見えはしないが、むき出しの足に触れるのは柔らかな布団の感触でも、フローリングの固い感触でもない。

手を伸ばして触れてみるが、それは夜露に濡れた草であり、ザラリとした大地であった。

どうしていいかわからずに途方に暮れる。

このまま再び横になって休むわけにもいかない。かといってどこに行ってもいいかも分からない。いつも守ってくれていた母はもういない。ただ隣にいないだけでなく、もう永遠に失われてしまったの

だということ、幼いながらに理解していた。

もうこの地上のどこを探しても、無条件に守ってくれたあの優しい母はいないのだ。どんなに手を伸ばしても泣き叫んでも、暖かくてほっとするぬくもりに抱きしめられることはもう二度とない。

空を、見上げる。無数の星に飾られた、今までに見たどんな空よりも美しい夜空を。

涙が一筋、頬を伝った。もう涙も枯れたと思っていた。だが、そんなこともなく、瞬きもせずに空を見つめたままの瞳からこぼれた液体は、止まることも知らずに柔らかな幼い頬を濡らし続けた。

第2章 2

第2章 2

どのくらいそうしていたのか。

膝を抱えて草の上に座り、一心に空を見続けていた瞳が地上に降りてきた。おびえたように自分の周囲を見回す。

嫌な気配がした。何か草を踏んで近づいてくる音がする。それは決して大きな音ではなかったが、己の息遣いしか聞こえてこないような静かな夜には十分すぎるほどの音だった。

それは少しずつ近づいてきているようだった。地面を踏む音も、草をかき分ける音も、刻一刻と近づいてくる。

逃げなければと思った。ごく自然に、本能的に。このままここに座り込んでいたら喰われるだけだと。

だが、足が動かなかった。指一本すらも動かない。ただ、見開いたまま閉じることのできなくなった目だけが、近づいてくる何かを探して彷徨っていた。

目の前の、高く茂った草の茂みが揺れていた。風のせいではない。何かが、もうすぐそばまで来ているのだ。

次の瞬間、それは草をかき分け、姿を現していた。最初は鼻先が、次いで大きな顔と前肢が。

獣は、目の前に獲物を認めて足を止めた。それは、いつか母と一緒に見た凶鑑に載っていた虎という獣にとても良く似ていた。だが、決定的に違うところもあった。毛皮の色も違っていたが、なによりその獣の額には黒々とした長い角が一本生えていた。

その一角の獣は、すぐには襲い掛かってこなかった。その場に足を止めたまま、逃げもしない小さな獲物を興味深そうに見ている。

容易に手に入りそうな獲物に喜んでいるのか、それとも思った以上に小さな成果にがっかりしているのか。ネコ科特有の虹彩をした

黄金色の瞳からはその感情をうかがい知ることが出来なかった。

震える事さえ出来ずに、まるで蛇ににらまれた蛙のようにその場に縛り付けられていた。恐ろしいのに、怖くて仕方ないのに、目をそらす事さえ出来ない。

唸り声のような音を喉の奥で鳴らしながら、獣が一步、足を踏み出した。

その瞬間、金縛りが解けたかのように体が自由になった。飛び上がるようにして立ち上がり、獣に背を向け駆け出した。地面を転がるようにして、自分にできる精一杯の速さで。

すぐ後ろで獣が動き出す気配がする。

必死に走った。だが、スピードも体力もまるで足りない。すぐに息が切れ、足を止めたくなる。だが、足を止めたらその場で自分の人生が終わってしまうことは分かり切っていた。理屈ではなく、本能で。

分かつてはいても、体は悲鳴を上げていた。もう走れないと、心臓が、足が訴えかけてくる。ふいに、足がもつれた。柔らかな草に頬を擦りつけるようにして転がった。そのままなすすべもなく体は何回転も地面を転がり、やがてその動きを止めた。もう、立ち上がる気力は無い。

頬を地面に押し付けたまま、近づいてくる獣を見つめた。まるで急ぐ様子もなく、ゆっくり近づいてくるその姿に逃げても無駄だったのだと悟る。

獣は逃げる獲物を追う間もまるで本気を出していなかった。本気を出さなくても捕まえられる獲物だと分かっていたからだ。

あのまま逃げ続けていたところで、追う側がちょっと本気を出したらすぐに捕まってしまったに違いない。逃げ切れるはずがなかったのだ。幼い子供が、野生の成獣を前にして。

獣は一歩ずつ近づいてくる。もう逃げないのかと様子を窺うようにゆっくりと。

もう、どうやっても逃げられる状況ではなかった。助けてくれる

人もいない。

諦めたように身動きもしないまま獣の大きな口を見ながら、痛いのは嫌だな そう思った時、誰かの声が頭の中に響いた。

『なぜ、呼ばない？』

その声は問いかけてくる。

何を呼べばいいの？ - 声に出さずに返すと、誰かは再び声を響かせた。

『死にたくなければ呼ぶがいい。お前の半身を』

声が頭の中に響いた瞬間、その名前が口から飛び出していた。幼いころからずっと一緒だった親友の名前が。

「狼ロウ!!!」

瞬間、目の前に迫っていた獣の姿が消えた。何かに弾き飛ばされたのだ。そいつの大きさに匹敵するほどの体を持った何かに。

それは、月の光が集まって形になったかのように美しい銀色の毛皮を持った、堂々たる体躯のオオカミだった。

ロウと呼ばれたそのオオカミは、自分より一回りほど大きな獣を弾き飛ばして自らの主に嬉しそうに鼻先を摺り寄せた。やっと呼んでもらえたことを喜んでいるかのように。

目の前に突然に現れたこの味方に、後先考えずにただ抱きついた。その懐かしいぬくもりに、涙があふれた。

一人ではなかったのだ。まだ自分には残されていた。何よりも心強く信じられる味方が。

危険が去ったことにほっとし、頼りになる親友の首を抱きしめたまま、その身を預けた。

しかし、危険はまだ去っていないかったのだ。威嚇をこめた激しいうなり声にはっとして顔を上げる。

銀のオオカミの身体越しに、さっきの獣が飛び掛かろうと身を低くしているのが見えた。

「危ない!!!」

悲鳴のような警告の声を上げる。獣は明らかに、新たに現れた銀

色の強敵を狙っていた。

その声を聞くまでもなく、ロウも自分を狙う獣の気配に気が付いていたのだろう。頼るように毛皮を握りしめていた手が開かれるやいなや、身をひるがえし敵に向かった。しかし、今度の攻撃は相手に先手を取られた。直撃は避けたものの、鋭い爪に脇腹を抉られ、地面に転がる。致命傷ではないが、すぐに立ち上がれる傷でもなかった。それでも立ち上がるうともがく相手に追い打ちをかけるように獣が迫る。が、その前に小さな影が立ちふさがった。手には、どこに落ちていたのか、己の身の丈の半分ほどはある棒切れを握っている。

「ロウに手を出すな!!!」

叫びはしたが、獣を撃退できるとは思っていなかった。勝てるはずがない。だが、大切な親友を見殺しにすることも出来なかった。

邪魔をされていきり立った獣が襲い掛かってくる。大きな爪が迫ってくるのを見ながら、死ぬことを覚悟した、その時。

大きな黒い影が、獣の横から飛び出してきた。一角の獣よりややほっそりとした優雅なその姿は黒豹と呼ばれる獣に酷似していた。

黒い獣は、幼子と傷ついたオオカミを背にかばうようにして、もう一頭の獣と対峙する。

ロウが飛び出し挑みかかったときにはいきり立った獣が、なぜかこの黒い獣には尻込みをしているようだった。

それを不思議に思いながら、なぜか言いようのない安心感に包まれている自分に気が付き、小さく首をかしげた。その感覚には覚えがある。それは、母の腕に抱きしめられ、守られている時の感覚に少しだけ似ていた。

獣たちはしばらく睨み合っていたが、ふいに一角の獣が身を翻し、草の向こうへ消えた。黒い獣は、遠ざかっていく気配を確かめるようにしばらく草むらを睨み付けていたが、もう戻ってこないことを確信したのか、大きく息をついた。まるで人間のように。

それから、背後にかばった存在を振り向いた。

今度はこの獣に襲われるのかと、思わず身を固くする。だが、その眼にも、牙にも不思議と恐怖心がわいてこなかった。少しだけ後ずさり、ロウの首に腕を巻きつけて大きな黒い姿を見上げる。

そんな主に倣うかのように銀のオオカミすっかり警戒を解いているようだった。目の前の獣を前に唸り声一つ上げない。

しばらくそうやってお互いを見つめあっていたが、不意に黒い獣が口を開いた。ずらりと並んだ牙に、恐ろしいと思う気持ちはなぜだかわいてこなかったが、条件反射のように身がすくむ。そんな姿を見て黒い獣は苦笑をもらす。獣なのに、人間のようなしぐさで。そして、

「この姿は恐ろしいか？」

初めて聞く言葉で問いかけられた。初めて聞くのに、なぜだかその言葉を理解していた。問いかけられている内容が不思議と頭の中で自分の知る言葉と結びつくのだ。不思議だったが、もつと不思議な出来事を前に思わず言葉が口をついていた。

「動物が、しゃべってる……!？」

それは、聞きなれた己の国の言葉だった。どうやら、理解できるからといって、話せるわけではないようだ。

「異国の者か？ 獣人ではないようだし、人間の子供だろうな……。しかし、参ったな」

獣の表情は読み取ることは出来ないが、困った様子なのは伝わってきた。先ほどは驚きすぎていて気が付かなかったが、その声は獣の口から出るのにふさわしいとは思えない、澄んだ若い女の声をしていた。

「今まであまり異国の言葉に興味がなかったから、どこの国の言葉かも分からん。もうすこし、勉強をしておくんだっ……」

今度は少し落ち込んだように。表情は分からずとも、彼女の感情は手に取るように分かった。もともと感情豊かな性質なのだろう。声の中に、その感情がにじみ出ていた。

そんな彼女の様子を見ながら、考える。自分は彼女の言葉を理解

しているが、そのことをどうやって伝えたらいいのだろう。なにしろ、彼女には自分の言葉はまるで伝わっていないようだから。

「しかし……」

言いながら、彼女はあたりを見回す。そうしている間、鼻と耳をピクピク動かしていたのは、おいと音の情報も同時に収集していたからだろう。しばらくそうしていたが、何の収穫もなかったようだ。彼女は鼻面にしわを寄せ、大きく息を吐いた。なんだか少し、怒っているような感じだった。

「近くに他の人間の気配はないか。血の匂いもしてこないから、獣に喰われてしまったわけでもないだろうし……。幼子の足で、ここから匂いも感じられないほど遠くから来たとは考え難い。と、いうことはだ。この子の親は、こんな幼い、しかも獣人の子ならいざ知らず、人族のこんなにも無力な存在をよりにもよってこの草原に置き去りにしたということだ。……なんて親だ」

いらいらと前肢を踏み鳴らす彼女が、自分のために怒ってくれているのが分かった。怒らなくていいと伝えたくても、彼女に伝えられる言葉が無い。だから――。

ロウの首から手を放し、疲れ切った体で立ち上がる。そのまま彼女のそばに行き、太くたくましい黒い前肢を両腕で抱きしめた。

彼女は自分に抱きついてきた小さな生き物をしばし戸惑ったように見つめ、それから優しく目を細めた。

「お前の名前は？……つと、言葉が違うんだっとな」

ギュツと腕に力を籠め、真上の彼女の眼を見ようと体を反らせながら、一生懸命に彼女の問いに答える。母親がつけてくれた、大好きな自分の名前を、自分を助けてくれたこの人に伝えたくて。

「雷砂」

「ライ……？すまない、もう一回たのめるか？もう一回、言ってみてくれ」

頷き、繰り返す。今度はもっとゆっくりと。

「ら・い・れ」

「ラーイサ。ライサ、でいいのか？これが、お前の名か？」
問われて頷いた。名前を伝えることが出来た。そのことがただ嬉しかった。

彼女は雷砂の名前を覚えるように何度か口の中で繰り返した後、嬉しそうに、

「ライサ。雷砂だな。よし、覚えたぞ」

そう言って笑った。声は人でも姿は獣のままだったので、何とも言えず怖い笑顔だったけれども。

その後、彼女は雷砂を鼻面で少し押し離すと、ゆっくりと伏せの姿勢になって改めて小さな体に向き直る。雷砂を怖がらせないようになるのか、慎重に目と目を合わせ、それから口を開く。

「お前はどうかやら私たちの言葉を理解しているみたいだな。ならば、私も名乗らねばなるまい。私はこの草原の獣人族の一部族、ライガ族の長の一族に連なる者。名はシンファという」

「し…ふあ？」

「少し難しい発音だったか？シンファだ。シ・ン・ファ」

「シンア…シーンファ…シンファ？」

「そうだ。シンファだ。よろしくな、雷砂」

満足そうにそう言って、シンファは大きな舌で雷砂の顔をぺろりと舐めた。

第2章 3

第2章 3

風を切ってシンファは草原を走っていた。草原を渡る風が強く吹き始めている。湿った空気を感じて、嵐になるかもしれない - と思う。嵐の前には巣穴に帰っていないと身動きできなくなるかもしれない - そんな風に考えながら、シンファは足を速めた。

一人であればあつという間にたどり着いてしまう集落への道のりがやけに長く感じる。何しろ、今のシンファは傷ついたオオカミを口にくわえ、その背中には小さな子供を乗せているのだ。まだ子供のないシンファには、誰かを口にくわえて運ぶという経験自体少なかったし、背中に誰かを乗せて全力疾走したことも数えるほどしかなかった。背中に乗っているのが、普段から親の背に乗りなれている獣人の子であればまだましであつただろうが、今シンファの背中に必死にしがみついている子供はそうではない。おそらく、こんな経験は初めてだろうし、何しろまだ幼い子供なのだ。本人に聞いたわけではないし、はっきりしたことは分からないが、恐らく生まれてから5年経つか経たないかといったところだろう。

まあ、ギヤーギヤー泣き騒がれないだけまだまし、なんだろうな - そんなことを考えながら、シンファは少しだけ足を速めた。極力連れの負担にならないように注意しながら。

少し先に、目印の木が見えてきた。部族の男たちが集落の周りの木につけている縄張りの印だ。

草原に住む各部族ごとに違った印を持つので、間違えることはない。あの印が見えてくれば、集落までは目と鼻の先だ。

ほっと息をつき、その拍子に落としそうになってしまったオオカミを慌てて啜えなおす。その間も、銀の獣はじっと動かず、おとなしくしている。身動きすることがシンファの負担になることを、ち

やんと理解しているのだろう。だが、理解してはいても、中々出来ることではない。仲間でもない者にこうやって運ばれることは、たとえ傷ついているとはいえ屈辱を伴うはずだ。強く、誇り高い獣であればなおさら。そして、シンファに啞えられ、運ばれているこのオオカミは、正に強くて誇高く、加えて並はずれて美しく賢い獣であった。

惜しいな - と思う。もしこの獣が主を定めていないのであれば、我が物としたかった - と。残念なことにはこの誇り高きオオカミはもうすでに、主とする者を定めている。もちろんその主とは、シンファの背中にへばりついている雷砂のことだ。二人の間にある絆に気が付かないほど、シンファも鈍感ではない。雷砂がシンファに身を預けているからこそ、このオオカミもそうしているのだ。シンファを信用しているのではない。己の主を信じているが故だ。

そうやって考え事をしている間に、いつの間にかライガ族の集落に着いていた。まだはずれなので人影はないが、中心地になればたくさん集まる、草原の中では1、2を争う大きな集落だ。

まずは、叔父上に相談するか シンファはそう考えて、進路を心地から少し東に取る。シンファの叔父はライガ族の長であり、拾った荷物をどうするか、判断を仰ぐ必要があると考えたのだ。

背中の子供を引き取るにしろ、どこかへ帰すとしても、一度は族長に会わせなくてはならないだろう。それに、族長のシルヴァンは博識で、たくさん国の言葉を知っている。彼ならこの子供がどこから来たのか、分かるのではないかとシンファは考えていた。

しばらく進み、乾いた草を組んで出来た『パロ』と呼ばれる住居の前でシンファは足を止めた。

その場に、背中荷物と啞えていた荷物をそつと降ろす。

「雷砂」

幼子の、呼びなれない響きの名前を呼び、色違いのきれいな瞳がこちらを向くのを待つ。雷砂は、オオカミの銀色の毛皮を抱きしめた後、おずおずとこちらを見上げた。

「少し、ここで待っていてくれ。ここは我が部族の族長の家だ。お前たちを族長に紹介したいが、今の姿のままでは目通り出来ない。私が身支度を整えて帰ってくるまでの間、少しの間だけ、ここでじっとしていてほしい。いいな？」

じっと見上げてくる雷砂の表情に動きはない。だが、理解した証拠に、小さな頷きを返してきた。

無表情で可愛げは無いが、素直で賢い。シンファは小さな客人にそんな評価を下す。もし、雷砂の行き場所がどうしても見つからなければ自分が面倒をみてもいいとシンファは考えていた。それ故の無意識の評価でもあった。

「いい子だ。では、行ってくる」

そう言い残して、シンファは叔父の巣穴の裏手にある、自分専用の巣穴に向かう。シンファのパ口は、叔父の物より二回りほど小さい、こじんまりとしたものだった。

入口の布を鼻先でかき分け、中に入る。それほど大きくはない住居なので、獣化したままでは身動きすら出来ない。だが、それでいいのだ。ここは、獣の姿の時に住む場所ではないのだから。

すつと息を吸い込んで軽く目を閉じ、意識を集中する。獣の姿が屋気楼のように揺らぎ、次の瞬間には全く別の姿がそこにはあった。それは一糸まとわぬ若い女の姿だった。黒く艶やかな髪は腰の辺りまであり、ぬけるような白い肌の背中を隠している。開かれた瞳は少し青みがかった黒。意志の強そうな顔立ちの凛々しくも美しい女だった。

彼女は大腿で部屋を横切り、奥にある木彫りのタンスから服を取り出し素早く身に着けた。そして、小走りに家を駆け出ると、族長の家の前へと向かった。

走りながら、先ほどと変わらず、シンファの言いつけどおりに待っている一人と一匹を認め、微笑む。足音に気が付いたのだろう。雷砂が振り向き、その眼をまあるく見開くのを見て、笑みはさらに深くなった。

「雷砂、きちんと待っていられたな。偉いぞ」
声をかけると、今度は小さな口がぼかんと開いた。その驚きようが可笑しいやら可愛いやらで、シンファは思わず吹き出してしまった。

雷砂はびつくりしすぎて笑われていることにも気が付かない。無意識に出てしまったのだろう手を、シンファの方に伸ばしてきたので、膝をつき、その手が触れやすいようにしてやる。小さな手が、確かめるように髪に触れ、頬に触れる。シンファは微笑み、気が済むまでしたいようにさせてやった。

最後に、色違いの瞳がシンファの瞳を覗き込む。瞳の色は、人の姿でも獣の姿でも変わることはない。雷砂は、さつき見た瞳と同じ色をしているので、やっと少し安心したようだった。

「気が済んだか？」

怖がらせないように優しく問いかける。小さな頷きが返ってくる。

「私が誰だか、もう分かるな？」

重ねて尋ねた。今度の問いには小さな声が返ってきた。

「シンファ」

「よし」

頷いて笑い、小さな体を抱き上げた。びつくりしたように瞬きを繰り返す様子が少し可愛いと思った。

そのまま、族長のパルへ向かう。途中、地に伏せている銀の獣の前で足を止め、

「お前の主をしばし借りるぞ。危険な目にはあわせないから、安心してここで待っていてくれ」

そう言うと、オオカミは分かったとばかりに小さく鼻を鳴らし、ゆったりとくつろいだ様子で前肢に顎を乗せた。

その様子を了解ととり、シンファは雷砂を抱いたまま、パロの入口の布をかき分け中に入った。

第2章 4

第2章 4

住居の中は少し薄暗く、シンファの所とは違い、何部屋かに分かれているようだった。

「叔父上、起きてくれ。話がある」

入口をくぐった勢いのまま、ずかずかと部屋の中央まで進み、奥の部屋へ声をかける。

奥で、人の動く気配がした。しばらくすると、一人の男が姿を現した。シンファの母の兄でありこの集落の長、ジルヴァンである。

壮年というにはまだ若い。顎の下には黒々としたひげを蓄え、ギョツと引き結んだ口元が少し頑固そうに見えた。今まで寝ていたのか、髪が乱れている。それを手ぐしで直しながら、不機嫌そうにじろりとシンファを見た。

「まだ朝には早すぎると思うが、わしの思い違いかな？」

嫌味のような問いかけに、

「いや、私の認識でも、朝はまだまだ先だよ、叔父上。ただ、緊急の用事でね。報告と相談があつて来た」

悪びれず答える。

「拾いものか？」

「そうだ。今日の見回りは私の担当だったが、その途中で見つけた。草原のど真ん中で親もなく、ホーン・タイガーに喰われそうになっていた」

「それはそれは。運のいい子供だな。お前が通りかからなければ、今頃骨も残っていなかったに違いない。それで、落とし主は？意地汚い胃袋の中でその子を待っているのか？」

暗に、子供の両親は先に喰われて死んだのかと聞かれ、シンファは首を横に振る。

「いいや。さつきも言ったが、この子は親もなく一人草原にいた。供は忠実な才オカミが一頭だけだ。辺りを探ったが、この子と近い者の匂いも、血の匂いもしなかった」

「捨て子か？しかし、よりもよってこの草原を選んで捨てるのは、ひどい親だな」

あきれたような叔父の言葉に、シンファは心の底から同意して頷く。

「全く同感だ。可愛げは足りないかもしれないが、賢くていい子だ。獣の餌にしている子じゃない」

思わず憤慨して声が高くなる。自分でもそのことに気が付き、はつとして叔父を見ると、彼は面白がるようにニヤニヤしながら彼女を見ていた。

「結構気に入っているようだな、その子供が。引き取り手が見つからなければお前が面倒をみてみるか？まあ、まずはその子供の親族がいなか、引き取る気はないのか、確認するところからはじめないといかんだろうが」

親族 その言葉を聞いて、叔父に知恵を借りたいことがあったことを思い出す。

「叔父上。叔父上は確か、色々な国の言葉を知っていたと思うのだが、誰かの話す言葉を聞いて、その言葉の国を言い当てることは出来るだろうか？」

「まあ、知っている言葉なら言い当てることも出来るだろうが……。なんだ？こんな時に。謎かけでもするつもりなのか？」

「謎かけというか何と言うか……この子供はどうやらこの辺りの生まれでは無いようだ。こちらの言葉は理解しているようなんだが、話す言葉はまるで聞いたことの無い言葉だな。叔父上なら知っているかと思っけて押しかけた次第だ」

「まるで聞いたことの無い言葉、か。この草原に立ち入る客人の護衛を生業に育ったお前でも聞いたことが無いというと、この大陸の言葉では無いかもしれんなあ」

そう言って、まじまじと己が姪の腕の中で縮こまっている子供を見つめた。金色の髪に白い肌、左右色違いの瞳……珍しい色合いではあるが、この大陸の人族の中においても特におかしくは無い容貌だ。今までに目を通した文献から創造するならば、北の大陸ではこの大陸より色彩の薄い人間が生まれることが多く、逆に南の大陸では色素の濃い人間が多いという。東は黒い髪に瞳の人間ばかりというし、残るは西だが……

『ちびすけ、私の言葉、分かるか？』

何とか覚えていた単語を組み合わせて、ひどい発音ながらも西の大陸の言葉で話しかけてみる。だが、じーっと目をそらさずに観察してみても、幼いその面に理解の色が浮かぶ事は無かった。むしろ、あまりに見つめられて怖くなったのか、それまで以上に自分を抱いている人の胸にしがみつき、何とか隠れようとしている様子がありありと分かる。その様子にジルヴァンは内心少し落ち込んだ。最近、部族の子供にも何かと怖がられる事が多い。整いすぎて若く見られがちの面相が気に入らず、髭を生やして威厳を考えたのだが、周りにはいまひとつ評判が悪い。特に女子供には。毎日手入れを欠かしたことの無いお気に入りの髭を撫で回しながら、渋い顔をしてうなづいている叔父に、シンファ思わずため息を一つ。

「叔父上、そんなに睨むな。雷砂が怯えている。……雷砂、大丈夫だ。髭だらけで見た目は怖いけど、気のいいおじさんだ。怖くないぞ」

ため息混じり、あきれ混じりにそう告げながら、怖がっている幼子を落ち着かせようとシンファは小さな体をぎゅっと抱きしめてから、その背中を軽くあやすように叩いてやる。そのあまりの言い様に、落ち込んだ様子の子のジルヴァンの様子はあえて気づかない振りをして。

「……で、さっきの変な言葉はなんだったんだ？」

身もふたも無い言葉にジルヴァンはがっくりと肩を落とした。そんな叔父の様子を面白そうに見ながら、

「つてのはもちろん冗談だが。発音は妙だったが、確か西の言葉だったか？前に西の大陸の部族の客人がそんな言葉を話していたな」
「まあな。その子供には通じなかったようだが」

「ああ。雷砂の話す言葉は、西の言葉ともまるで違う。なんだか不思議な響きで……。まあ、取りあえず聞いてみてくれるか？叔父上。……雷砂」

それまでのきびきびした口調と一転して、柔らかい口調で腕の中の子供に呼びかける。雷砂はその呼びかけに答えて顔を上げ、シニアの言葉に小さく、だがはつきりと頷いた。そして。

『 x x ……』

なにやら言葉を発したが、それはジルヴァンも初めて聞く言葉だった。この大陸の言葉とも、西の大陸の言葉とも違う。ジルヴァンは顎鬚を触りながら小さく唸った。

「どうだ？叔父上」

「なんとというか……確かにお前の言うとおり、不思議な響きだな」
「だろう？」

「もう一度、聞かせてもらえるかな？あー、雷砂……だったか？」名前を呼ばれ、びっくりしたように色違いの瞳がジルヴァンを見た。その瞬間、魅せられたかの様にその1対の輝きに惹きつけられる。そんな自分に気がついてかすかに目を見開いた。まだほんの子供なのに、その瞳の持つ光は力強く魅力的で、だが同時に不安そうに頼りなく、守ってやらねばと思わせる何かがあった。

ジルヴァンは思う。この子が持つ瞳の強い輝きは天性のもの。いずれ成長すればさらに輝きを増すに違いない、と。

じつと無垢な瞳を覗き込む。澄んだ瞳は美しく、幼いながらも整った顔立ちと相まって、思わず頭を垂れてしまいそうな気高さすら感じさせた。しかし、そう感じる傍らで、彼は肌があわ立つような感覚も味わっていた。己よりもはるかに強い存在を前にして感じる高揚感と恐れにも似た感情にその身をかすかに震わせる。彼は、雷砂の瞳の輝きのその奥に隠れた何か途方も無い力を感じていた。人

族の身が持つには強すぎる力のその片鱗を。

「 x x ……」

もう一度、雷砂が口を開く。子供らしい少し舌足らずな口調で。瞳を閉じ、その響きを頭の中で吟味する。しかし、それと同じ言語を書物で見た記憶も、耳で聞いた記憶も、残念ながら導き出すことは出来なかった。

よほど遠い国から来たのか、それとも……。

不意に頭に浮かんだ『異世界』という言葉に、ジルヴァンは口元に苦い笑みを浮かべた。

確かに異世界の存在を肯定する学者もいるし、こことは違う世界について書かれた書物もある。しかし、ジルヴァンは異世界論の信者ではなかった。西の大陸には、異界へ通じる門があると聞くが、それも己が目で確かめた訳ではない。絶対に無い、あるわけ無いと否定するつもりも無かったが、諸手をあげて肯定する気も更々無い。ジルヴァンは自分で見聞きし、触れ、感じた事は信じるが、他人の語る夢物語の様な話には疑問を差し挟まずにはいられない、頑固な現実主義者だった。

「叔父上？」

呼ばれてハッと顔を上げる。

どうやら思考の渦に飲み込まれていたようだ。シンファが問いかけるような眼差しでこちらを見ていた。

軽く咳払いをし、考えをまとめる。何と答えるべきか。雷砂という子供をこれからどうするべきか。

個人的には、その子供に興味があった。しかし、族長という立場としては興味本位では決められない。

人族の、しかも普通の出自ではないであろう存在を部族に受け入れてはたしていいものなのかどうか。

しかし……ジルヴァンは、先ほど見た瞳の輝きを思い出す。

無垢で澄んだ瞳の奥にはとてつもない力の奔流があった。恐らくただの人間では気がつけまい。戦うことに特化した獣人の身であっ

たが故に気がつくことが出来たのだろう。恐らく本人も己の体に宿る力に気がついていない筈だ。獣人族の中にあっても雷砂の秘められた能力に気づけるものはそういないに違いない。現に、次期族長として、皆にその力を認められているシンファにしても、腕に抱く子供の体に潜む強い力に気がついていない様子も無い。

獣人族は力の強い者を尊ぶ。しかし、ジルヴァンは長年の経験から、強すぎる力は時に毒にもなりうるのだということも知っていた。雷砂を受け入れることは、果たして部族にとって吉となるのか、凶となるのか……。

『……………？』

色違いの瞳が不安そうにこちらを見上げていた。その瞳と目を合わせた瞬間、ジルヴァンは心を決めていた。

雷砂の頭をそつと撫で、微笑みかける。

「心配することはない。お前の身はわが部族が引き受けよう。出来る限りの知識と技を教え、お前が一人でも生きていける術を与える事を約束する。雷砂、お前が幸福に生きていけるよう、尽力すると誓おう」

心を込めて、言葉を紡いだ。真摯に、誠実に。

言葉の意味が分かったのか、分からないのか……両の瞳を真ん丸く見開いてこちらを見上げる様は、なんとも言えず愛らしかった。いずれはこの部族の誰よりも強大な存在になるであろう幼子だが……今は小さく、己の身を守る術も知らない。無垢で小さな、守るべき者。ジルヴァンはかつて、一度だけその腕に抱いた小さな息子の事をふと思い出していた。彼の息子は今はもういない。息子はとうの昔に失われ、そして今日、新たな守るべき存在を得た。素直に、目の前の存在を愛おしいと感じている自分に気がつき、ジルヴァンは晴れやかな笑みをその顔に浮かべた。

そうして雷砂は受け入れられた。この世界に、確かな居場所を得た。

その日、何の前触れも無く異なる世界へ投げ落とされた幼子は、頼れる庇護者と一族を得て、新たな世界へ一步を踏み出したのだった。

第3章 1

第三章 1

風が再び草原を駆けた。雷砂の黄金の髪を巻き上げ、通り過ぎていく。

「雷砂？」

名前を呼ぶ養い親の声。その声に導かれるように心が現在へ戻ってくる。目の前で、少し心配そうにしている人の顔を見上げ、ゆっくりと瞬きを一つ。そうする間にやっと心が追いついてきた。

「シンファ」

目の前の人の名前を呼ぶ。大好きな、大切な人の名前。その声を聞いて、ほっとしたようにその人は微笑んだ。

「あんまりボーっとしてるから心配したぞ？心をどこへ飛ばしていた？」

そう問われて苦笑い。素直に答えを返す。

「昔を思い出していたんだ。シンファと初めて会った日の事」

「ああ、あの時の事か。あの時は肝を冷やしたぞ。何せ、まだ幼い子供がたった一人、大人でも忌避するような危険な場所に置き去りにされていたんだからな。ま、頼もしいボディーガードはついていたがな」

悪戯っぽく笑って、雷砂の傍らに寝そべる狼を見た。ロウは、我関せずとばかりに昼寝を決め込んでいる。雷砂はそんな親友の毛皮に手を滑らせ、目を細めた。

雄々しく美しいこの親友は、いつでも雷砂を守り、その孤独を癒してくれる。シンファは雷砂を愛し、大切にしてくれたけれど、彼女には彼女のやるべき事があり、決して暇な身の上では無かった。特に2年前から雷砂が部族の集落を離れ、別の住処に身を置くよう

になつてからは、1週間に1度会えればいいほうだった。それでも、彼女は可能な限り雷砂に会いにきてくれたし、彼女が精一杯の努力をしてくれていている事も分かつていた。自分がそれに甘えているのだということも。

会いたいのなら自分から会いに行けばいい。だが、雷砂は何時もそうしない。会いたいと思つても、集落へ自ら足を運ぶのは数えるほど。よほどの用事が出来た時だけ。後はただ待っていた。彼女が雷砂に会いたいと感じ、実際に会いに来てくれるのを、日々の生活を続けながら待ち焦がれるようにただじつと。

会いに来てくれたシンファの瞳が雷砂を見つけ、「元気にしてたか？」と微笑んでくれた瞬間、雷砂はたとえようも無く嬉しくなるのだ。まっすぐに向けられる彼女の愛情を感じて。それは己が彼女をどれだけ愛しているのかを再確認できる瞬間でもあった。

目に見えない愛情を量るようなその行為は、本当は良くないものだと分かっている。会いたいと思うのなら素直に会いに行くほうがよほど素直で好ましい行為だと言う事も。

- でも、分かっているのと出来るのでは、まったく別問題なんだよなあ……。

声に出さずにつぶやいて、口元に思わず苦笑を刻む。

そんな主人に気がついたのだろう。しつとりと濡れた鼻面が雷砂の手に寄せられる。忠実な瞳が雷砂の顔を見上げていた。

一人で暮らすことにも、一人の時を過ごすことにもすっかり慣れた。それでも時折、ふつと一人でいる事が辛くなる時もある。そんな時はいつもロウが傍にいてくれた。いつでも、たとえ姿が見えずとも、雷砂に何かあれば瞬時に駆けつけてくれる、忠実で絶対的な守護者。大切な、友達。

ロウがいると寂しさが紛れ、一人でいることも怖くない。だからつい、人に交わるのを避けて通るようになってしまった。必要以上に深く関わらないように距離をとる事に慣れてしまった。シンファの部族とも、雷砂を受け入れ、親切にしてくれるサライの村人達と

も。

「雷砂、たまには集落に顔を見せる。部族の連中はお前に新しい技を教えてやるかと待ち構えているし、お前がくれば叔父上も喜ぶ」
雷砂の声に出さない思いを見透かしたようなその言葉に、少しドキツとしてシンファの顔を見上げた。彼女の目は遠くを見ていた。草原の先の、彼女の仲間が住まう場所を見ているかのように。真剣な、少し厳しい眼差し。彼女の脳裏に浮かぶ面影はきつと……。

「……そんなに悪いのか？親父殿の病は」

親父殿とは、シンファの叔父であり、ライガの族長でもあるジルヴァンの事。彼からの要望もあり、雷砂は彼をそう呼ぶ。父親を知らない雷砂にとって、父と呼べる相手は彼だけだった。

その彼が病に侵されたのはちょうど1年前。病は、不治の病と呼べる類のものだった。

それを知った日から、雷砂は草原に自生する薬草を集める事を生業とするようになった。不治と呼ばれる病ではあったが、その進行を遅らせる事の出来る薬草があることを知ったからだ。ただ、その薬草は希少で、自生する場所も限られている。この草原にはわずかではあるが、その薬草を見つけることが出来た。

だが、その薬草もさすがに冬にはその姿を消し、サライの村の薬草売りの老婆の手下にあるものを買って付けてはいたが、その量にも限りがあり……。雷砂は春が来るのを今か今かと待ち侘びていた。

冬が明け、やっと空気が柔らかさを増し、日差しも暖かくなってきた。草原の緑も、新しい芽を伸ばし始め、数日後に控えたサライの春祭りの頃には、その薬草も採取出来るくらいの丈になるだろうと毎日様子を見ながら待っていた。冬の終わりの1ヶ月程、煎じた物ですら手に入れられず、不安と焦りにジリジリしながら。

「お前が用意してくれていた薬で一時は落ち着いていたのだが、数日前に倒れてな。それ以来寝込んでいる。今日、出掛けにくれぐれも雷砂に悟られるなとうるさく言われてきたばかりだったが、お前に隠し事はやはり無理だったな」

「そうか……。親父殿も意地っ張りだからな。薬が切れたのはいつ頃？」

「最後に届けてもらったのが確か一月ほど前だったな？一日に飲む回数を減らしながら飲みつないでいたようだったが、ここ一週間ほどは飲んでいないと思う」

薬効の強い薬だが、確かな効果を狙うのなら日に三度は飲む必要がある。それを日に一度に減らしていた上に、一週間薬を飲んでいないとすれば、体の中の病魔が目覚まして活動を始めてもおかしくない頃だった。

我慢強い族長の性格を考えると、症状や痛みはかなり強いのだろうと容易に想像できる。なにせ普段であれば骨の一本や二本折つていても平気で動き回るような男なのだ。その彼が動かずにじっとしていなければどうにも耐えられないくらいにその病状は重いのだろう。

どうにかしないと一唇をかみ締め、考える。そしてふと、ある考えが頭に浮かんだ。

ジルヴァンの病に効く薬草は、この草原ではまだ芽吹いたばかりだが、もっと南の土地ならばもう採取されている可能性があるかもしれない。そうであれば、それがもうサライに入ってきているのではないだろうか、と。

顔を上げ、シンファを見上げた。

「用事を思い出したから、サライに行つて来るよ。シンファはもう出発するの？」

「いや。もう一度、叔父上の顔を見て、荷物を準備してからだから、出発までにはもう少しかかりそうだ。日が大地に沈む前には出たいと思っているが」

「そうか。なら、後で見送りに行く。親父殿の様子も気になるし、なるべく急ぐから、その……」

待つててくれの一言が中々言い出せずに口ごもる。シンファには雷砂の見送りを待つ義理など無いのに、我俣を押し付けているよう

なそんな気持ちがして。

だが、彼女にはそんな雷砂の心の動きなど全てお見通しなのだろう。にこりと笑って雷砂の細い体を抱き寄せた。

「急がなくていい。気をつけて、ゆっくり来い。お前が見送りに来てくれるのを、ちゃんと待っているから」

優しい言葉。雷砂は養い親の体をそつと抱き返して、それから体を離し、背伸びをしてその頬にキスをした。

シンファは、養い子からのめったに無い貴重な愛情表現に一瞬目を丸くし、それから嬉しそうに笑った。雷砂も笑い返し、

「それじゃ、行つて来る。待つて。親父殿と一緒に」

「ああ。慌てすぎて転ぶんじゃないぞ。草原の獣に気をつけて帰つて来い」

その答えを受けて頷く。子供扱いされるのは嫌いだが、その相手がシンファであれば不快感はない。むしろ、くすぐりたいような嬉しさを感じながら、雷砂は草を蹴り駆け出した。

子供の足とは思えないほどの速さで離れて行く頼りない背中。その後ろを付かず離れず、銀の獣が小さな主を守るように付き従う。

シンファは草原に一人立ち、一人と一匹の姿が豆粒のような点になつて見えなくなるまで、じつと見守っていた。いとし子の成長を嬉しく、そして少し寂しくも感じながら。

第3章 2

第3章 2

その日のサライは賑わっていた。

宿場町としての普段の賑わいとも違う、少し浮かれたような賑やかさ。それは数日後に控えた村の一大イベントである春祭りのせいもあるのだろう。

冬が過ぎ、少しずつ暖かくなってきた村の広場へ続く道を、冬の重苦しい服装とはまた違った春らしい装いに身を包んだ人々が行き来する中、早足で村はずれに向かう少女がいた。

時折すれ違う村の住人とそつなく挨拶を交わしながら、それでも足取りを緩めずに進む少女の年の頃は10歳に届くか届かないかといったところか。可愛らしい顔立ちをした少女とすれ違うたび、村人は親しげな挨拶を贈り、旅人は辺鄙な村に珍しい、街の薫りのする鮮やかな色合いの衣装とそれに負けない容姿に目を見張る。

あの少女は誰かと問えば、この村の誰もが名を知っているであろうその少女の名前をミルファーシカという。このさほど大きくは無いが程ほどに栄えているサライの村の村長が、目に入れても痛くないほどに可愛がっている大事な大事な一人娘である。

この村の村長は村の経営に熱心で正直者、上の者に有り勝ちな偉そうで悪どい所が無く、村の皆に慕われている。故に、その娘であるミルファーシカも父親と同様に村人達から愛されていた。

「おや、ミル嬢ちゃん。そんなに急いでどこへ行くね？」

そんな声をかけた村の男に、少女はにっこり笑って答える。

「村の近くで銀色の狼を見たって話を聞いたの。見かけたのはついさっきなんですって。銀の狼は雷砂の守り神でしょう？きつと雷砂が薬師のサイ・クー老師の所にいるはずよ。だから、急いで会い

に行くの」

早口で答えて、少しの時間も惜しいというようにあっという間に小さな姿は人ごみにまぎれて見えなくなった。

雷砂という名前を聞いて男は微笑み、周りで聞いていた村人も暖かい表情で村はずれへ向かう少女を見送る。

村長の娘が、獣人族の一部族の庇護の下育った雷砂という子供にとっても懐いていると言う事は周知の事実だった。雷砂の姿を見つけるたびに、まるで飼い主を見つけた子犬のように走っていくミルフアーシカの姿はもう日常的な事になっている。

金色の髪に色違いの瞳、凛々しく整った顔立ちの雷砂と、人形のように愛らしい容姿のミルフアーシカが並んで歩く姿は何とも似合いの一对で、それを見る者の心を和ませた。

雷砂が見た目通りの『少年』であればどれほど可愛いカップルが誕生したかと、村の誰もが残念に思っていることを、当の本人である雷砂とミルだけが知らずにいる。

今日のサライもいたって平和だった。これから起こる恐ろしい出来事を、まだ誰も知らない。

第3章 〓〓 (後書き)

短くてすみません……次話は今ちょっと長く書きますので、ご勘弁を。

第3章 3

第3章 3

「サイ老師!!」

入り口の扉を跳ね除けるようにして駆け込んできた少女を、サイ唯一の薬師であるサイ・クーは大した驚きも見せずに、微笑さえ浮かべて迎えた。

「おやおや、今日も元気じゃのう。ほれ、ミル嬢ちゃん。一息ついて、この爺の入れた茶でも飲みなされ」

見事な白髪と長い髭の優しい老人は、ニコニコしながら緑色のドロツとした液体の入った茶碗を差し出す。

それを見て、嫌そうな顔になるミルファーシカ。

だが、走り続けて来たせいでいい加減喉の渇きも限界を迎えていた。体はこれでもかと言うくらいに水分を欲している。ゴクリと喉を鳴らして、恐る恐るサイ・クーの持つ茶碗に顔を近づけた。

極悪な見た目とは裏腹にそれほど嫌なにおいはしない。むしろ爽やかな、胸がスーッとするような香りがして、ミルは董色の瞳をまんまるくする。

そんな少女の様子があまりに可愛くておかしくて、老人は堪え切れずにホッホッホッと声を上げて笑った。

「なによう。そんなに笑わなくてもいいじゃない。仕方ないですよ。ドロドロしてて、お話に出てくる毒薬みたいなんだもの」

そう言って、可愛らしいふくれ面を披露する。サイ・クーはそんな少女をなだめる様に言葉を紡いだ。笑った拍子に目元に滲んだ涙をそっと拭いながら。

「この爺が大好きなミル嬢ちゃんに毒を盛るはずが無かるうが。わしの配合した、疲れが取れてすっきりする薬草茶じゃよ。ほれ、

だまされたと思って飲んでみい。疲れがすっかりとれるぞい」

「疲れが？本当？？」

好奇心旺盛な本来の性格が顔を出し、ミルは恐る恐る得体の知れない液体入りの茶碗を受け取った。もう一度、そつと匂いをかいでみる。まずそうな匂いではない。むしろ美味しそうな匂いだと感じる。ニコニコした老爺と茶碗の中身を見比べ、しばしの逡巡。

「新鮮な薬草じゃから、きつとうまいぞ？なにせ、雷砂が朝採りしてきた薬草を使っておるからの」

「雷砂が！！」

パツと少女の表情が輝く。そして次の瞬間には、茶碗の中身は飲み干されていた。爽やかな味がする液体だった。少し青臭い感じもしたが、雷砂が手ずから摘んだ薬草だと思えばちつとも気にならなかった。傍らで再び笑い声を上げている老人の様子もまるで気にならない。気になる事はただ一つ。

「雷砂が来てたの？もう行っちゃった？どのくらい前にここを出たの？」

「そうさの。そう遠くには行っておらんとは思うが」

矢次早な問いかけに惑うことなく、さらりと答えを返す。その答えを聞くや否や！。

「ありがとう！！！探してみる！！！！」

答える間も惜しむような返答を残し、少女は外へと飛び出していった。恐ろしいほどの勢いで。

その後姿を見送り、しばらくして！。

老爺はよつこらせと立ち上がり、狭い店の奥にある大きな甕に向かって声をかけた。

「もう大丈夫じゃろ。出ておいで」

その声に答える様に甕の広い口から2本の手が伸びる。その手は甕の口を掴んで、軽々と己の体を甕の中から外へと連れ出した。

小さなその身の丈を優に超える大きさの甕であったが、やはりじつとしていることは窮屈だったのだらう。大きく伸びをして、金色

の髪の凛々しい少年……いや、少女は、サイ・クーの方へ向き直り、
にっこりと笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0171x/>

龍は暁に啼く

2011年11月20日19時46分発行